

エースのお仕事

(チーム力ということについて)

テニス部の顧問を30年以上もやっているのだから、私は約30人のエースと出会ったことになる。その中には、陸のように下級生のうちからエースだった者もいたから、その人数は、私のキャリア年数よりも少しだけ少ないということになるのだろう。彼ら(彼女ら)の中には、2番手以下の選手に大きく水を開ける実力を持つ者もいたし、2番手3番手に肉薄される者もいた。しかし、それらのエースたちに共通していたのは、どんなコンディションでも、校内の試合では(実際には負けることがあったにもかかわらず)、いつもエースとして「負けるわけにはいかない」というプレッシャーの中で試合をしていたことである。だから、彼ら(彼女ら)は練習試合がことのほか好きで、校内の試合では見られないようなのびのびとしたプレーをしたものである。なにしろ、他校の選手が相手なら、エースのプライドもプレッシャーも関係ないのだから。

岩西には金子という絶対エースがいて、チームの精神的な支柱にもなっている。チーム内での金子のアドバンテージは盤石^{ばんじやく}であり、エースとしてのプライドを脅かされるような事態はほとんど起こりえない。校内のシングルス^{おびやく}の試合では、彼はこれまで負けたことがないばかりか、恐らく危機感すら抱くことがないに違いないのだ。ダブルスについても同様のことが言える。校内では、上位の4人を組み合わせて、色々な対戦を行っているのだろうが、春季大会の準決勝で金子・谷口が辻・古関を一方的に退けたように、金子の入るペアが負けることは想像しにくいのだ。

岩東のエースは三分一陸である。彼の状況は、金子と少しだけ違っている。押しも押されぬエースとしての実力を持ちながら、チームには、校内の試合で何度か敗れたことのある水上がいるという点である。そして、ここに来て進境^{いちじろ}著しい今村の存在である。

(2人の先輩に失礼を承知でいえば)負けて元々であり、全力で立ち向かってくる水上や今村に対して、陸は常にエースのプライドを賭け、「負けられない試合」を強いられる。そして頻繁に行われるそんな試合に負けてな^{すがすが}おどこか清々しい先輩たちとは対照的に、勝った後の陸は疲労困憊^{こんばい}した顔をしているのだ。

「負けられない試合」……岩西・金子が、そんなプレッシャーの中で試合を行うことは、校内ではあり得ない。練習試合や、彼がこれまでに何度か経験した全道大会も、「負けられない試合」のプレッシャーとは全く異質の緊張感である。だから、彼がプライドを賭けて「負けられない試合」のプレッシャーを味わうことができたのは、空知支部の個人戦の決勝で何度か当たった岩東・三分一との試合を除いて他になかったわけだ。一方、陸は？と言え、ば、「負けられない試合」ぐらい、ダブルスもシングルスも含めて、毎日のようにやっている。そして苦しみながらも、ほとんどの局面で堂々と退けている。辛い立場ではあるけれど、エースはそうやってチームによって鍛えられるものだし、それを可能にするのがチーム力なのだ。そうやって鍛えられたメンタリティは、競れば競るほど力を発揮するに違いない。あとは、チームと自分自身を信じて全力を尽くすだけである。